



園芸作物栽培に関する

これからの対策

Q & A

なればなりませんので圃場の排水対策は十分行っておく必要があります。秋野菜の収穫も終わりつつあると思いますが、野菜残渣などは圃場に放置せずに圃場外に持ち出し、圃場をきれいにしておきましょう。特に根コブ病や軟腐病など病害が発生した圃場では、病気の株は残さず圃場外に持ち出し処分しましょう。

雨の日は越冬野菜の植わっている畝間に排水がないか確認しておき、溝からえを行っておきましょう。また圃場周りの雑草地は害虫の越冬場所となりますのでできるだけ草刈りや除草剤の散布をしておきましょう。

◎越冬前の野菜管理

冬期間は越冬作物がしっかりと根を張って春に備える時期となりますので圃場の排水を良くし根が伸びやすい環境を整えてやらなければなりません。また、基本的に年内の追肥は必要ありません。窒素分の多い肥料を施用するとかえって越冬する力が弱くなります。

積雪下では作物は地面に押しつけられ、茎葉の傷みから雑菌が侵入しやすくなり被害を受けやすくなります。マルチや敷きワラ、モミガラを敷いて土との接触を少なくすることによって被害は軽減できます。また、ソラマメ、エンドウなどは冬の寒風が当たらないように手当てしてやりましょう。

タマネギは圃場

初期被害回避



幼苗期に食害を受けると後の生育が非常に遅れてしまう。

ウリハムシの食害



山間部では飛来害虫の被害が多い。早めの防除が必要。

気象庁はフニーニャ現象が見られるとして、今冬の気象予報では特に西日本で降雪量が多くなり、北陸、東日本は平年並みの冬と予想しておりますが、現在の状況を見てもみずと冬の訪れは早い傾向にあります。近年積雪量は少ない傾向にあります。降雨量が少なくなっているわけではありませんが、タマネギ、ニンニク、ソラマメ、イチゴなど越冬野菜は冬の間にも充分根を張っておか

の排水を万全にしておきましょう。苗が残るか消えるかのポイントには苗の大きさはありません。圃場の排水の良し悪しにあります。その他、深植え、老化苗、窒素主体の肥料の多施用などによっても腐りが発生します。なお、年内に追肥をされる方がおられますが、規定の元肥が入れている場合は追肥の必要はありません。窒素を効かせ過ぎるとかえって耐寒性が低下してしまいます。分球はもともタマネギが持っている性質で、育種選抜の過程で分球しにくい品種が育成されてきました。しかし、早植えしたり、大きな苗を植えたりますとトウ立ちや分球が発生しやすくなります。特に分球の場合は元肥が多かったり、年内の追肥が多かったりすると発生しやすくなります。

◎芋類の保管

イモ類の収穫は終わっているかと思えます。保管するサツマイモやサトイモは収穫後、洗わずに充分乾燥させます。特に種芋にするサトイモは株のまま保存とし、芋まわりの土の湿り気がとれるまで充分乾かします。芋はモミガラに埋めるか新聞紙で包みダンボール箱に納めます。通気性の無いビニール袋や発泡スチロール箱は使わないでください。保管は居間や台所の冷蔵庫の上などできるだけ暖かな場所に置きます。ネズミの食害にも注意しましょう。

◎この一年の反省と新たな年に向かって

①病害虫の多発生
近年の温暖化と集中豪雨的な雨の降り方がたんだ地域の菜園の管理にも大きな影響を及ぼしてきています。また、温暖化の進行により温度と湿度が高くなってきており病害虫が繁殖しやすい状況となります。春先からサビ病、べト病、ウドンコ病、灰色カビ病などが多発しアブラムシ、コナジラミ、ハダニ類、キスジノミハムシ、ハムシ類、ネキリムシ、ア

ヨトウムシの大発生



ヨトウムシの若齢幼虫は葉裏に潜み食害する。



老齢幼虫になると暴食し、数日で被害が急拡大する。

土壌処理剤と植穴処理剤

処理方法	薬剤名 (※印は創薬)	対象病害虫 (記載以外の対象害虫も多い)	大根	キャベツ	白菜	フロロ	トマト	ナス	きゅうり
土壌処理剤 (全面又は条条混和)	ダイアジノン粒剤5	ネキリムシ、コガネムシ、キスジノミハムシ	○	○	○	○	○	○	○
	※カルボス微粒剤F	ネキリムシ、タネバエ	○	○	○	○	○	○	○
	ネビジン粉剤	ネコブ病	○	○	○	○	○	○	○
	※フォース粒剤	ネキリムシ、タネバエ、コガネムシ	○	○	○	○	○	○	○
苗処理剤 (定植前苗散布)	フロンスイト粉剤	ネコブ病、立枯病	○	○	○	○	○	○	○
	※バダン粒剤4	キスジノミハムシ	○	○	○	○	○	○	○
植穴処理剤 (株元散布)	モベントフロアブル	アブラムシ、コナジラミ、ダニ類	○	○	○	○	○	○	○
	ジュリボフロアブル	アブラムシ、アオムシ、ヨトウムシ	○	○	○	○	○	○	○
	アクタラ粒剤	アオムシ、アブラムシ、アザミウマ	○	○	○	○	○	○	○
	アドマイヤー1粒剤	アブラムシ、アザミウマ、コガネムシ	○	○	○	○	○	○	○
	ジェイエース粒剤	アブラムシ、アオムシ、ヨトウムシ	○	○	○	○	○	○	○
	スタークル粒剤	アブラムシ、コナジラミ、キスジノミハムシ	○	○	○	○	○	○	○
	ダントツ粒剤	アブラムシ、コナジラミ、アザミウマ	○	○	○	○	○	○	○
	プレバソン粒剤	アオムシ、コナガ、メイガ類	○	○	○	○	○	○	○
ベストガード粒剤	アブラムシ、コナジラミ、アザミウマ	○	○	○	○	○	○	○	
モスピラン粒剤	アブラムシ、アオムシ、ヨトウムシ	○	○	○	○	○	○	○	

オムシ、ヨトウムシなど多くの害虫が発生しました。このような状況下では病害虫が蔓延する前に予防散布を徹底すること、早期発見早期防除を心がけることが大切です。特に播種・定植直後の幼苗期の被害はその後の生育に大きな影響を与えます。定植直前での殺菌剤の散布と、殺虫剤の苗処理、土壌処理剤、植穴処理剤は欠かせなくなっています。なお、土壌処理剤と植穴処理剤の薬剤の選択ミスや使用法の間違いが目立ち、初期の効果が得られていない事例が見受けられます。表に整理してみましたので参考にしてください。

②畝立てと排水

野菜の根の張り具合が野菜の出来を左右しますが、畑作物は空気層のある土壌中しか根は伸びません。一般にたんなん管内の土壌は重粘土質で排水が良くありません。こうした圃場では土壌表面の排水を徹底することにも畝も20cm以上の高さが必要です。ですから畝上げの作業においては30cm位の畝を作る気持ちでなければ20cmの高さを得ることはできません。

③植栽密度

作物が健全に育つためには植え込み過ぎないようにしなければなりません。特にダイコン、ハクサイ、キャベツなど秋野菜やホウレンソウ、コマツナなど軟弱野菜は密植の傾向が見られます。密植により株間の通風採光が悪くなり軟弱気味に育ち、また防除薬剤も届きにくくなることにより病害虫が蔓延します。秋野菜などは10㎡当たり40株程度が目安となります。

肥料の特質

化成肥料 (有機原料は殆ど使われていない)	複合肥料	そさい3号、あざひ、野菜の達人、アグリフラッシュ	速効成分を含む元肥、追肥用。多すぎると肥あたりしやすい。
	単肥	固形30号、IB化成S1、エコロング	緩効性肥料で元肥に向く。
有機化成肥料 (化成と有機の混合品)	単肥	窒素(N) 尿素、硫安 リン酸(P) ようりん、重焼りん 加里(K) 硫化加里、けい酸加里	N、P、Kの単成分肥料で複合肥料の成分調整として補完的に使う。
	複合肥料	有機ブリケット、園芸有機特A801	
有機質肥料 (有機原料100%使用)	固形	有機アグレット、HG有機666	遅効きで特に低温時は肥効が出にくい。作物や土壌に優しい。肥あたりしにくい。
	粉状	天然ボカシ、油粕、鶏糞	

④施肥

作物が生育するためには肥料は必要ですが、多用すると根が傷み養分の吸収がかえって悪くなったり、作物自体が軟弱に育って病害虫の被害を受けやすくなったりします。施用しすぎってしまった肥料を後で取ることはできません。元肥は少なめに施用し追肥で調整する方が肥料の利用率も高まり良い結果を得られるでしょう。なお、尿素や硫安など窒素成分の高い肥料を多用すると、かえってホウ素や石灰の吸収が悪くなり生育障害を起こしやすくなります。

窒素の過剰施肥害



窒素過剰はホウ素の吸収を阻害しホウ素欠乏症が出やすくなる。

⑤播種・育苗

野菜栽培のスタートは播種から始まり育苗期を経て圃場に植えつけられます。ですから発芽してこなければスタートが切れないわけで、このトラブルも少なくありません。種が古かったということを除けば原因として最も多いのは播種位置が深いまたは覆土が厚すぎることです。種も発芽時は人と同じで呼吸が盛んとなりますが播種位置が深いと窒息してしまいます。また、播種位置が適当でも水遣りが不規則で発芽直後の乾湿の差が激しかったり、土壌雑菌が多かったりして発芽直後に幼芽や幼根が侵されてしまします。夏場は直射日光による高温障害等も見られますので注意が必要です。

発芽不良の状況



覆土の厚いところの発芽が遅れている。



大門 優
園芸アドバイザー
お問合せ先
東部ふれあいセンター内営農課
TEL.51-8004
TEL.070-1296-1499

バックナンバーはJAたんなんホームページ
http://ja.tannan.com/広報誌をご覧ください。